

# 坂道のある学校

北村けんじ・著

鈴木たくま・絵





少年少女／創作文学

## 坂道のある学校

NDC 913 偕成社 222p. 21cm 1979年

1976年10月 1刷

1979年9月 6刷

|     |             |
|-----|-------------|
| 著者  | きたむら 北村 けんじ |
| 発行者 | 今村 廣        |

発行所 株式会社 偕成社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5  
TEL (03) 260-3221 (代) 〒162

振替 東京5-1352番

本文印刷 新興印刷製本株式会社

多色印刷 小宮山印刷株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。Printed in Japan

8393-719380-0904

© 北村けんじ 鈴木みづほ 1976

# 坂道のある学校

北村けんじ





# はしがき

ベルでくぎられた学校の時間

きみは、なにを考えたか

きみは、なにをつくったか

学校ってなんだろう

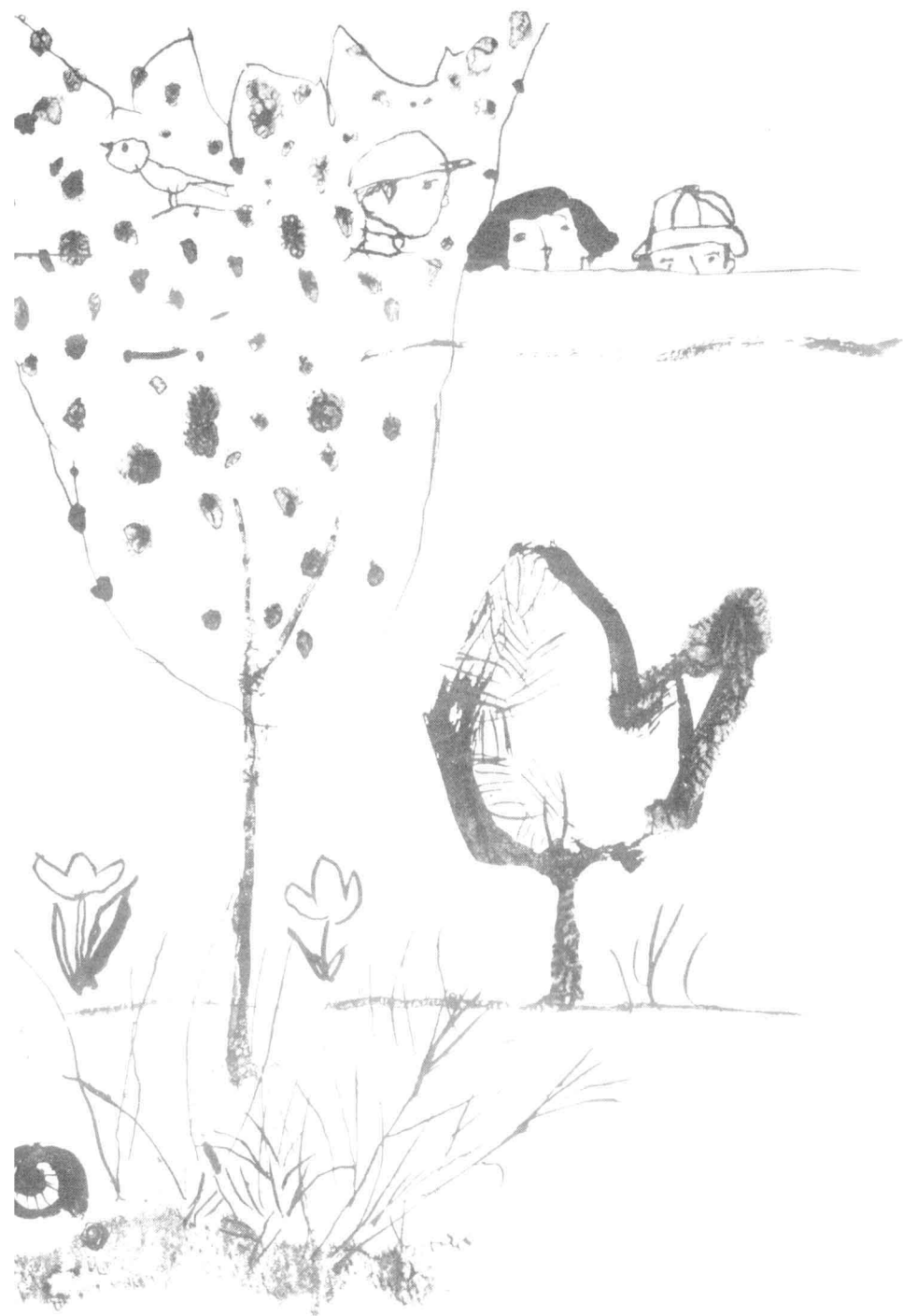
友だちってなんだろう

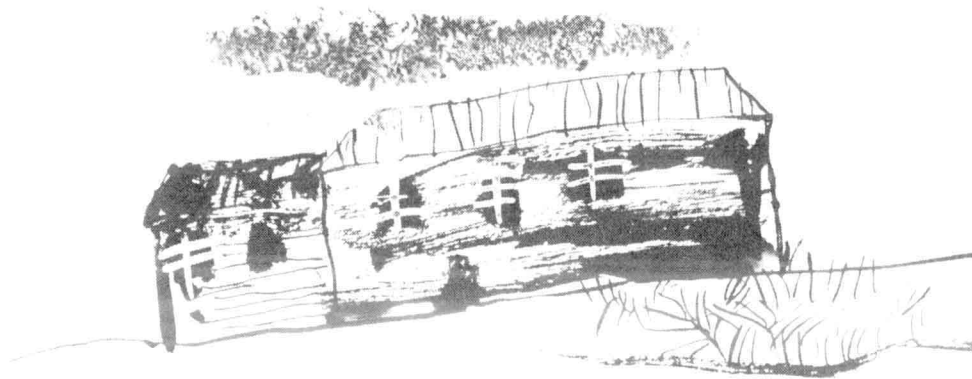
学校から帰るとき

きみ、かばんはおもくないかい

夕日にむかって、胸をはることができるとかい







坂道のある学校／もくじ

橋の上の五班  
7

赤いたまご  
47

おコマ先生  
87

風のあるマラソンコース  
133

ケムシの行進  
169

名まえのない日  
187

作者と作品について  
187





著者・北村<sup>きたむら</sup>けんじ

1929年、三重県に生まれる。三重大学養成科卒業。日本児童文学者協会会員。「うりんこの山」「ハトと飛んだぼく」(新美南吉賞)「まぼろしの巨鯨シマ」(サンケイ児童出版文化賞)「チョビ屋は町のまがりかど」等の著書がある。現住所／三重県桑名郡多度町戸津588-4

画家・鈴木<sup>すずき</sup>たくま

1918年、横浜に生まれ、東京で育つ。児童出版美術家連盟会員。主な作品に「ふとったきみとやせたぼく』『おとなになんか負けないぞ』『竜宮へいったトミばあやん』『ひとりひとりの戦争』『お日さまのむすめ』『あんまりだ! ジェミー』等。現住所／埼玉県所沢市西新井町5-13



# 橋<sup>はし</sup>の上<sup>の</sup>の五<sup>は</sup>班<sup>ん</sup>

坂道<sup>さかみち</sup>の下に、けられはじかれた小  
石があつまる。でも、だれかにふ  
みしめられていくうち、そこは石  
だたみになってしまっていく。



ふと、小さなチョウが、足もとのほそい道から飛びたつのを、ぼくは見た。白いがモンシロチョウではない。羽の動きはいかにもよわわしいが、追いかけると、すばやく直線的にける。

チョウの新種かも……。からだをのりだしてまた追いかけると、チョウは白い光をふりまき、するりと身をかわしながら枝のはざまをぬってにげていく。にがすものか……。

ふいに、ぼくはシダの葉かげの岩に足をすべらせた。しまった！ ひざこぞうをさすつているうちに、白いチョウは垂直に上昇し、こずえのさきにきえていった。

ああ。もうすこしのところだったのに。

ぼくが、ねっとりとしたてのひらのあせをズボンでぬぐいながら、もとの列にひきかえすと、シンジとノブオが、小枝を下くちびると上くちびるのあいだにはさんで、小鬼の顔をつくってふざけていた。

そのわらい声がきれたとき、ぼくはあたりがあまりしずかなのにおどろいた。

「おい、みんなの声がしないぞ。」

ぼくは背のびをして、前につづいている道を見すかした。道は両わきのシダにふさがれて、ほそくきれぎれに見えるが、たしかにつづいている。

しかし、ほんのさっきまで見えかくれしていた、さきを歩く四班の白い帽子は、どこにも見あたらなかった。

「おい、四班のぼけなすやろう。」

シンジはとがったあごをつきだし、大声でさげんだ。が、声はかえってこない。

「ぼけなす殿、返事をされい！」

「……………」

「ヤッホー、どこだよ……」

はじめふざけていたシンジの声が、へなへなとしおれてすぼんでいく。

「おかしいなあ。」

のぼってくるもちゅう、だまりがちに、ずつとうしろをついてきたケイスケがぼつりといった。

のぼり道はずうっと一本道だと思っていたが、いま思いかえすと、もちゅう二つにわかれていたところがあつたような気もする。

すると、ぼくたち、やっぱりまよってしまったのか。シンジもノブオも、おまえ、班長のせいだというようなふくれっつらをして、ぼくを見る。いやだなあ。なにもぼくは、すでに班長になったわけじゃないんだから。

ケイスケが先頭にきてつぶやいた。

「見てくるよ。」

「おい、まて、ちょっとまてよ。」

そういうぼくをふりきって、ケイスケは右がわのふみしめたようなあとをつたい、そこからシダのしげみをひよいとびこえて、きえていった。

きょうはキャンプの第一日め。ぼくたちはキャンプ場の水晶谷から、白いびょうぶのような岩がきり立っている砂山をめざしてのぼっているのだ。六年生全員二十四名。四名ずつ六班にわかれ、シンジ、ノブオ、ケイスケとぼくは五班で、列のさいごから二番めに就いていた。

「お、おい、どうする?」

ずうたいの大きい、それに男にしては色白のノブオは、ぼくにすりよってきて、あつい息をふきかけた。



「なあに、だいじょうぶさ。うしろの六班ばんがそのうちにやってくるさ。」

「もし、やってこなかったら？」

「それから考えるさ。」

「どのように？」

ほんとうにめんどろなやつ。こんなふぬけが、テストならいつも九十点いじょうとるんだからあきれてしまう。

ぼくは、あらっぼくリュックサックをかたにかけ、下のほうから声がきこえやしないかと、耳をすました。それにしても六班ばんはおそかった。気みじかなリュウタがいるのだから、もう追いついてきてもよさそうなものだが。

しばらくして、ケイスケが、いま歩いてきたばかりの道のうしろから、ひょいとあらわれた。

「あれ、へんだなあ。」

「どこまでいったんだ？」

「どこって……白い石づたいにいったら、またここへでてしまったのさ。こりや、ひょっとするとキツネ道かも。」

「キツネ道？　それ、なんだよ？」

「子持ちのキツネが、子どもをまもるためにつけたまよい道だよ。」

「……まさか。」

そういいながらも、ノブオはからだをゆすりはじめた。

「やだなあ。な、どうする？」

シンジまでがあつぼったいてのひらで、ぼくのうでをやたらにぎってくる。ぼくはそれをふりきって、ケイスケの顔を見た。

「やっぱりもどろう。こんなときは……」

教室では、口数もすくなくめだたないケイスケ。そのケイスケの背<sup>せ</sup>た<sup>た</sup>けが、すいっとのびていく。ぼくはそんな気がして、

「じゃ、そうするか。」

と、すなおにしたがった。

ノブオは、てくてくと、もうもどりはじめていた。

「まで！　ぼくが先頭<sup>せんとう</sup>に立つ。」

ケイスケはノブオをうしろにひきもどすと、さきに立ってゆっくりとくだりはじめた。

ノブオはちょっとむくれたが、ケイスケに道をあげるよりほかなかった。

くだり道はらくだった。谷からの風が、はだにはりついたシャツのあいだをふきぬける。だからもつところよいはずなのに、ずずと浮き石にのって前のめりになるたびに、ぼくの胸はおもくなる。

みんなになんていわれるかな。

ゆううつなこちらの気持ちもさっししないで、シンジとノブオは、いま歩いている道がもとの道だとわかっているので安心なのか、「はらがへった、はらがへった」と、トレパンのゴムをはらの上でならした。そのうち、「どこで、昼にしよう」と、しきりにくりかえす。ほんとうにいい気なものだ。

ぼくはふたりの声をきくまいと、目の前を飛びかうアブを、わざとおおげさにはらった。ああ、こんな五班にはいるんじゃないかった。

もともと班の編成は、先生がくんだものだ。ぼくは、この三人といっしょにくみたったわけではない。かといって、女子のようにほかのだれかとくみたいと、スズメのさえずりのようにさわぎもしなかった。だれとでもよかったのだ。それより、テントのなかでど



んないたずらをしてやろうか、きもだめしにはだれをおどろかせてやろうかと、ひとりかってにおもしろがっていただけだった。

ただ四人が、いや正確せいかくに言えばケイスケをのぞいた三人が、調子ちようしにのって話しあったことが一つあった。

「おい、なあ、テントのなかで牛かんぎゅうかんで一ばいやろう。」

シンジがみんなの頭をよせていったのが、ことのはじめだった。

「うちのとうちゃんいうことにや……」

歌のもんくのでだしのようだった。

「仕事の帰しごとりに、酒屋さかやで牛かんぎゅうかんをさかなに一ばいやってくるのが、この世よでいちばんの極ごく楽らくだってさ。どうだい、おれたちもいちど、きゅっとやってみるか？」

シンジはさかずきをもつかっこうをして、舌したをペタンとならした。

「えっ？ 酒さけをもっていくって、そんな……先生に見つかったら……」

ノブオが牛のような目をして、みんなを見まわした。

「そうおどろくなよ、勉強屋。そうもいくまいから、ジュースあたりでがまんするのさ。」

「うん、おもしろい。やろう、やろう。」